

## 関大独文60年：回顧、現状、そしてこれから

その他のタイトル	60 Jahre Germanistisches Seminar der Kansai Universität : Vergangenheit, Gegenwart und Zukunft
著者	八亀 徳也
雑誌名	独逸文學
巻	54
ページ	1-7
発行年	2010-03-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00018028">http://hdl.handle.net/10112/00018028</a>

## 関大独文60年 — 回顧、現状、そしてこれから —

八 亀 徳 也

### 1

平成21年11月28日、「ドイツ文学科創立60周年記念式典」が本学〈校友・父母会館〉で盛大に催された。専修幹事の開会の挨拶に始まり、教員OB・卒業生代表の回想談などのあと、現教員の講演が続き、最後に閉会の挨拶で式典は閉じられた。引き続き懇親会が向かい側の〈100周年記念会館〉内のレストラン〈紫紺〉で行なわれ、参加者はかつての同窓生と旧交を温め合い、恩師とも打ち解け、昔話に花を咲かせて暫し青春時代にもどった。会の掉尾は逍遙歌（「嵐劈く」）で飾られた。出席者は式典が108名、懇親会が86名であったが、今回はとくに20人もの独文現役学生が準備・運営を手伝ってくれたのみならず、有志の諸君が式典の中で、ドイツ民謡とクリスマス曲の合唱を伴奏つきで披露してくれた。なお、これより10年前の平成11年12月12日に「ドイツ文学科創設50周年記念式典」が挙行されている。

独文学科（現在「ドイツ語ドイツ文学専修」）が人間で言う還暦を迎えるにあたり、この組織が60年という長い歴史の中で果たしてきた役割や業務や実績、またそこで教えた人々の営みや触れ合いなどについて、筆者自身の思い出もまじえて振り返り、専修が目下置かれている状況を直視し、さらには専修の今後の展望にも思いを馳せたい。もっとも、専修最古参である私も60年のうちの5分の3しか在職しておらず、往時の事情に詳しくはないことにあらかじめご了解を賜りたい。

### 2

関西大学文学部独逸文学科がこの千里山の地に産声を上げたのは、

1949年（昭和24年）4月のことであった。同じこの年には、文学部に新聞学科、史学科、仏蘭西文学科も置かれた。なお前年には、哲学科、国文学科、英文学科が設置されている。昭和23年、24年と言えば、全国的に旧制大学が新制大学に移行していた時期である。本学もこの動きに合わせて独文学科を新設したと思われる。しかも注目すべきは、すでに発足時に独文学科を1、2部ともに開設したことである。

初年度のスタッフとしては教授に上道直夫氏、助教授に前田敬作氏と福本喜之助氏、員外教授に渡辺格司氏、講師に中村恒雄、斉藤清の両氏がおられた。すなわち6人の陣容である。員外教授制度は1960年（昭和35年）まで続く。またここで言う講師とは現在の非常勤講師のことであろうが、専任講師と非常勤講師との区別が出来たのは1957年（昭和32年）からである。上記上道直夫氏は早くも1936年（昭和11年）から本学の講師を務められ、のちに（1959年）文学部長になられた。福本喜之助氏も専任を長く続けられ、定年延長も全うされた。初期の頃の非常勤講師の顔ぶれを見ると、阪大のドイツ語教官が多いことが分かる。つまり、この頃より関大と阪大との関係が密接であったのだろう。

さて、独文の専任教員数（員外教授を除く）は、スタート時の3名状態がしばらく続き、1957年（昭和32年）に専任講師枠も出来て6名に、翌年には助手も採用されて8名に、1960年（昭和35年）にはふたケタの10名になり、以後毎年のように増え続け、1981年（昭和56年）にはついに19名にまで達する。昭和30年代、40年代の急激な教員増は、この時期の大学進学率の上昇、従って大学数の増加を物語っている。しかし1981年まで増え続けたスタッフも、すでに翌年から減り始め、2000年（平成12年）の外国語教育研究機構の立ち上げ（2009年4月に外国語学部昇格）と、後述する文学部の改革とにより減少の一途を辿り、現在は僅か7名を数えるのみである。また学生数も大幅に落ち込んだ。かつては一学年で70名を越す時代もあったのに対し、今は10名台で、20名を確保できるのも稀になった。

また、この60年間の変遷に対応してか、独文の名称も次々と変わった。発足時の「独逸文学科」は、38年続いたのち1987年（昭和62年）に「ドイツ文学科」と改められ、11年後の1998年（平成10年）には「ドイツ語ドイツ文学科」に変更され、これもわずか6年経った2004年（平成16年）

に「ドイツ語ドイツ文学専修」に変わり、さらに本年4月からは「ドイツ学専修」と称することになっている。日本人の得意な看板の頻繁な掛け替えであるが、60年で5回も変わるとは実に目まぐるしい現象である。

### 3

ここで、独文が過去に学生に提供したカリキュラムについて簡単に見ておこう。

我々が知り得る最も古い専門科目の名称は1950年（昭和25年）のものであるが、それらは、独文学作品研究、独文学演習、専門独語、独文学史等である。それから次第に科目数が増え（1951年にはすでに福本喜之助氏担当の中世独文学及語学と独語史が見える）、1957年（昭和32年）に、その後長らく定着することになるカリキュラムが確立する。配当年次と科目名は次の通りである。

1年次：

専門独語（一）、（二）

2年次：

専門独語（三）、独文学史、独文学作品研究（一）、（二）

3年次：

独語学概論、独文学作品研究（三）、（四）、独文学演習（一）、（二）

4年次：

独文学特殊講義、独文学演習（三）、（四）、独語学演習

なお、この年（1957年）から、阪大で教鞭を執られ、長期間阪神ドイツ文学会に多大の貢献をされたヴェルナー・リルツ氏が、初めてのドイツ人教員として、本学へ非常勤でお見えになっている。

周知のように、昔は他大学と同じように、2年次のいわゆる教養ドイツ語で使うテキストは圧倒的に文学作品であり、専門科目では（独文科ゆえ当然のことであったが）、ほとんど18、19世紀、時には20世紀の古典作品が占めていた。作家名を列挙してみると、レッシング、ゲーテ、シラー、クライスト、グリルバルツァー、ハイネ、シュティフター、シ

ユニツラー、カロッサ、ヘッセ、Th. マンなどで、ときおり Fr. シュトリヒ、W. カイザー、H. クーンなどの文学論が使用された。私自身、ゲーテの『ゲッツ』、シラーの『群盗』、『たくらみと恋』、『ヴァレンシユタイン』、レンツの『家庭教師』、『軍人たち』、ドロステ＝ヒュルスホフの『ユダヤ人のブナの木』などを採用したが、現今の学生は文学にほとんど興味を示さず、またドイツ語を読解する力が極端に落ちている。本誌237ページの卒業論文題目一覧で一目瞭然なように、近年の卒業生の卒論テーマは著しく文化の分野にシフトしている。我々の専修では少なくとも15年前に、授業の内容をもはや文学に限定せず、語学・文学・文化の三本柱で構成する体制を作り、それは現在まで続いている。

4

1949年（昭和24年）8月6日発行の『関西大学学報』第230号で、“文学部教授、前予科教授”の飯田正一という先生が、「思い出の二三」なるタイトルをつけた予科追想文の中で、学生の噂話によく上る、思い出深いドイツ語教員として3人の先生の名前を挙げておられる。一人の先生は、キャンパス内の池に棲む亀を次から次へ捕っては手料理で食べられたので、ついにはほとんどの亀がいなくなってしまったという。他の二人は、教授室の四角い火鉢を囲んで蝮をジュージューと焼いて、うまそうに食しておられたとのこと（ママシは、桃やタケノコとならんで昔から千里丘陵の名物であった）。おそらくは戦時中の食糧難時代のエピソードで、今から見ればずい分風流な話であるが、これらの先生方はさしずめ、昔よく言われた「ドイツ語の三奇人」であろう。我々の学生時代には、たいていの大学に、ことのほか厳しい外国語教師を3人選んで、「ドイツ語の三悪人」とか「フランス語の三悪人」と呼ぶ慣わしがあった。上記後者の二人の内の一人は、毎年ドイツ語の試験で2、3人を合格させるだけで残りは全員落とした、という話を以前どこかで読んだ記憶がある。

筆者が関大独文に着任したのは1973年（昭和48年）4月で、日本全国で吹き荒れた大学紛争の嵐が収まってまだ間もない時期であった。大学も学部も学科をも分断したイデオロギーの対立軸に、日常の個人的な好

悪の感情も絡まって生じた争いのわだかまりはまだ完全に消滅していなかった。それぞれの人の心に残った傷跡は決して小さくはなかった。当時助手であった私の耳に「あの人には気をつけるように」と囁く声もあった。しかし、このような人間的対立を生んだ紛争や事件の数々も、徐々に当事者の心の中で単に過去の出来事として記憶されるにとどまり、もはや決定的分裂が再来することはなかった。皆が大人として人づきあい、同僚づきあいをしていたのである。それから何年も経って、独文の空気を一変させる人事の大失敗があった。これについては、いつか誰かが説明せねばなるまい。

私は最近、大学教師という存在についてつくづく思うことがある。

大学の教員であれば、社会からある程度信頼の目で見てもらえる。また大学教員になるには、記憶力や判断力など一定の知力が必要である。だが、この知力というのも人間の様々な能力の一つでしかない。体力と闘争心に秀でた者はスポーツ選手になるであろうし、感性が豊かで器用な者は芸術の道に進むであろう。しかし、これら体力や感性あるいは社会性などもまた人間の能力の一つでしかない。従ってこれだけでは、立派な人間であり得る保証はない。なぜなら、我々の周辺には、金と権力しか念頭にない辣腕政治家、マナーの極めて劣るスポーツマン、尊大な芸能人・映画人などなどがあるからである。大学教員の世界も例外ではない。それでは真に立派な人間の条件とは何か。正義感か、責任感か、誠実さか、優しさか、勇気か、決断力か。それとも…私はまだ結論に達していない。

## 5

現実に戻ろう。

6年前の改革により、文学部は2004年度（平成16年度）から、それまでの学科制を止め、総合人文学科の下に専修を置くことになった。もと8学科2教室であった学部は今19専修を擁している。同時に、学生の専修分属は2年進級時になされることになり、1年次生は自分の好きな専修を選べるようになった。この自由選択性自体なんら悪いものではないが、指定校推薦やAO入試で特定の専修を決めて入った学生でも、入学

後の翻意を許される。このやり方は、高校生に一種の背信行為を助長するという、教育上大きな問題点を孕んでいる。思うに、あの時の学部執行部が導入したこの新しい制度は、当時政府や経済界が推進していた構造改革、民営化、市場原理主義などと奇妙に符合する。

この結果、独文に進む学生は極端に減った。数字は前述したとおりである。しかし実は、問題の根は思ったよりも深い。根本的な原因はゆとり教育と1991年（平成3年）の大学設置基準の大綱化である。今日の学生は、大学に入って出来れば苦勞したくないと願っている。ましてや第二外国語を使う専修はご免である。だから「楽勝コース」に走ったり、自分たちの「ニーズ」で専修を決める。この事情が象徴的に現れているのが中国語中国学専修である。第二外国語として中国語を選択する一般学生は多いが（すなわち「ニーズ」である）、しかしこの専修で学ぼうとまで思う学生はさほど多くない（すなわち「楽勝コース」）。

確か今から15年か20年ほど前に一部の評論家が、日本は第二の鎖国の時代にある、と主張していた。「ゆとり教育」と「大綱化」が大手を振って歩き出した頃である。この頃から日本人は、海外旅行はするが、より深く外国文化や外国語を学ぼうとすることはしなくなった。大学では外国語の軽視が始まった。私はひたすら危惧する。グローバリゼーションの大波にもみにもまれているのに、こんな有様で日本人の国際競争力は大丈夫なのか、と。

## 6

あるいはこういう考え方があるかも知れない。近隣の大学でも、文学部の独文が他学科もしくは他専修と合併したり吸収されたりし、外国語学部のドイツ語科が廃止になったりしている状況下で、関大の独文がなおも独立した組織でおれるのは不幸中の幸いである、と。しかしこの認識はやはり甘いと言わざるを得ない。我々の専修はいつ解体されてしまうか、予断を許さないからである。

日本の国策が、明治以来二度目の脱亜入欧もしくは初めての脱米入欧の方向を取らない限り、日本人が外国語とくにヨーロッパ語の重要性和面白さを再認識しない限り、あるいは現実的希望として、企業等が採用

試験の際に、学生の在学中の成績、とりわけ外国語の成績を重視するか外国語の試験を課すような風潮でも起こらない限り、現在のどん底から容易に浮上することはできない。

今の我々にできるのは、この冬の時代状況を注意深く見守りながら、少しでも多くの学生を確保する方策を根気よく、粘り強く模索し実践してゆくことである。そして他方、軽薄な「社会のニーズ」、「学生のニーズ」などに惑わされることなく、本来のあるべき独文の姿を見失わず、我々の学燈を消さず灯し続けることである。独文の焔は守りきらねばならない。

追記：本稿2章、3章の執筆に際しては、「文学部ドイツ学専修（独逸文学科）の歴史」（本学院生、酒井友里氏作成）を参照した。